

## “Aura について”

Galen（2 世紀，AD）：

罹患する身体部位について

〔Hermet Heintel : Quellen zur Geschichte der Epilepsie. Huber, Bern, 1975, pp. 24-29より〕

訳：福島 裕（弘前大学医学部神経精神医学教室教授）

“Aura” はてんかん発作の直前に生ずる運動・知覚・自律神経・精神の各症状として、わが国の医学では久しく親しまれて来た用語ではあるが、現在では、aura 自体が発作症状の一部（単純部分発作）であり、発作そのものであると理解されている。したがって、今日のてんかん学においては、aura はその存在する場所を失うことになったのであるが、日常の診療では、便利な用語として、なお生きながらえているようである。

Aura という言葉を医学用語として導入したのは Galen であるといわれている。それは、本来、“そよ風”の意味の言葉であるが、それがどのようにして、いわゆる aura の意味で使われるようになったか、これも Heintel の著書から引用して訳出した。

てんかん性疾患に関しては、細心の注意をもって鑑別する必要がある。それは、この疾患においても、頭そのものが病気であることが多いのであるが、一方では、他の〔器官〕部位との感応状態があることも、ままあるからである。メランコリーに 3 型があるように、てんかんも 3 型に区別される必要がある。しかし、ほとんどの医師はそのことをなおざりにしている。脳に病があるという点では、すべての型のてんかんは共通している。しかし、大部分のてんかんは、脳そのものから症状が起ってくるものの、これとは別に、胃の入口の部分からの脳への感応として上昇してくる「ストマコス」といわれている型のてんかんもある。このような感応作用は、眼症状が「ストマコス」で生じるというように、白内障患者でもみられるところである。だが、一方稀には、分類上、別な種類とか異型とみられるような、異なった型のてんかんもある。つまり、症状が身体のとどこか一部から始まり、それが頭に昇ってくるのが患者にわかるというものである。私自身が、まだ、若かった頃、13才の少年で、はじめて、この発作をみた。その時、名医達が自分の治療法を試すために集まってきたのであるが、私は、その少年が、自分の状態について、次のように説明するのをきいた。その状態は下腿から始まり、そこから大腿、その上の鼠蹊部、側胸部を経て、真直ぐに、頸部、さらに頭部へと上昇する。〔その状態が〕頭部に達すると、もはや、彼〔その少年〕は意識を失ってしまうという。頭にくるものがどのような性質のものか、という医師達の質問に対しては、その少年は答えるすべを知らなかった。しかし、その子供とは別の、もう一人の若者は愚鈍ではなく、その出来事を十分に認知し、うまく説明することが出来た。彼は、そのあがってくるものが、冷たいそよ風（アウラ）のようなものと述べたのである。私の師、ペロプス（Pelops）は、それを、全体の中での部分の変化

の際に生ずる特殊な物質か、あるいは pneumatic な物質かの何れか一つであると考えた。罹患部位に発生した、異常な〔反自然的な〕液体が、有害動物のもつ毒と同じ性質の強い力をもつとしても、それは何ら訝かるにあたらないというのである。蠍にさされた場合やごく小さな蜘蛛に咬まれた場合に、大きく、激しい変化が全身を見舞うのをみれば、これらの動物から注入された物質がごく微量であっても、強い力を持つということに疑いを懐くものがあるだろうか？

毒蜘蛛に咬まれた場合、その蜘蛛がいかに小さいものであれ、蜘蛛の口から毒が身体に入るということは、十分了解される場所である。しかし、海鳩〔ガンギエイ〕の毒針や陸棲の蠍の毒針には、その先端に毒液を注入するための孔はあいておらず、針の先は明らかに尖っているだけであるようにみえる。しかし、そこから気体性にせよ、液体性にせよ、ごく微量でしかも極めて強力な作用を持つ物質が出るものと考えなければならない。蠍に刺された直後のある男は、刺された時に、どっと霰に打たれたように思ったという。そして、やがて体が冷たくなり、冷汗を流したが、治療によってようやく救われた。そこで、ペロプスは、このような外因がなくとも、体の中で同様な物質が産出されることは有りえないことではないとし、このような物質が神経の一部に生じた場合、それは前に述べたような変化によってか、あるいは、そよ風〔アウラ〕のような pneumatic な物質によってか、何れにせよ連続性の路をたどって上昇し、神経の源（脳）に至って、その効果を及ぼすことになる」と述べたのである。実際、蠍が、神経とか動脈とか静脈に毒針を突き刺した場合には、しばしば、はなばだ激しい症状が生ずる。蠍の毒針は皮膚を通して、体の深部にまでも達する。一方、これに対して、小さな蜘蛛の場合には、皮膚の表層が傷つけられるにすぎない。したがって、全身に対する毒の作用は明らかに皮膚を介してのみ行われる。皮膚は全身を覆っており、しかも、神経によって養われている。それ故、咬まれた場所から、急速に毒の作用が〔皮膚〕全体に及ぶということはありうることであり、その毒が全身の皮膚から、これに接する皮下の部分に廻り、さらに、次から次へと連続性に隣接組織に毒が廻って、身体各部に毒の侵襲が及ぶことになる。こうして、その毒が主要な器官の一つに達すると、その人は死の危険にさらされることになる。このような場合には、傷を受けた場合よりも上の所で、紐で縛るという処置をとると極めて効果がある。このことは、われわれが、蛇についても、蠍についても実証しているし、また、直接死の危険があるので疑わしいと思われるかも知れないが、ヤマカガシについても経験している。私がアレキサンドリヤに居た当時、街からそう遠くないところに住む一人の農夫が（ヤマカガシに）指を咬まれた。その時、彼は指の根元を紐で、きつく、しっかりと縛り、街に住む〔彼の〕知人である医師の許に走った。そして、その医師に、〔悪い症状に〕苦しまなくても済むように、その指を根元から切断してほしいと頼んだ。実際、希望通りの処置がとられ、その結果、それ以上何の処置も必要とせず、彼は救われた。私はまた蛇毒治療薬を服用し、指の切断を受けてよかったという別の患者も知っている。勿論、その他にも、葡萄栽培の農夫で、蛇に咬まれた時に、直ちに、その指を鎌で切り落したという例もみている。つまり、彼は咬まれた部分よりも根元に近い関節のところで、その指を切断したのである。その後は、指の傷の治療以外に、これといった治療も受けずに治癒した。

（さて、話を前に戻すと、）その時集まった医師達は、その少年の下腿から始まるてんかんに対しては、はじめに、下剤をかけ、全身を清浄にし、次にタブシアとか辛子菜から作った薬を〔問題の〕患部に貼布するのがよいと考えて、少年の治療にとりかかった。さらに、病気のはじまる部位よりも上部で、下肢を縛った。このようにして、それまで毎日起っていた発作の発

来をおさえたのである。

ここで、このようなことを説明したのは、さほど重要でもない身体部位から発作が生ずる理由を理解するために、少し補足しておきたいと考えたからである。ただし、このような感応によって生ずるてんかん性けいれんの原因については、なお解明すべき余地が残っている現状であり、実際、その原因については、ペロプスだけでなく、その場に居合せた他の医師達の誰もがはっきりとは語り得なかった。かつて、私がこのような感応による発作をみた時には、患者は小さく飛び跳ねる動作をした後に、強いけいれんもなしに倒れた。〔その時〕私は吃逆の時にしばしば胃にもみられる何らかの現象が起ったものに違いないと考えた。私自身も胡椒を沢山摂ると、すぐに吃逆を起すが、他にも、そのような人は少なくない。つまり、こういう人達では胃の入口部分が極めて敏感なのである。医師のみならず、〔他の〕あらゆる人達がこの病（てんかん）を「ストマコス」と呼びならわしていることについては、すでに述べたところである。私はてんかんが脳の特発病によらず、交感作用（感応）によって起る患者の発作を観察した。その発作では持続性のれん縮は全くみられず、間をおく間代性のけいれんのみを示したところから、私は、「ストマコス」を病む患者での「ストマコス」の運動と同じような運動が、てんかん患者の脳内でも起るものと結論した。肥満に悩むものも、栄養失調に苦しむものも、ともに嚥下に障害があることは明白である。刺激性の果汁を飲んだ時には、それによって吃逆が起るだけではなく、時には、全身のけいれんさえも起ることが観察される。その場合、その刺激性の物質が吐き出されてしまえば、それはすぐにおさまる。これと同じことで、もともとのもろ弱器官から神経の源（脳）に運ばれてきたものをすべて速やかに排出してしまおうとする運動がその神経の源に起ったとしても、驚くにあたらない。神経系の間代性の運動によって起るような、その他のすべての症状も同じであろう。けいれん性ないしは博動性の運動の何れも示すことなく、静かに倒れる発作は激しい冷却によって生ずるのである。その種の冷却によって生ずるものとしては嗜眠もある。しかし、卒中は、その突然の発症からみて、冷たいか、濃いか、あるいは、粘稠性の液体が一度に重要な脳室を満たしてしまうことによって生ずるということを示唆している。それは、嗜眠病、脳炎（フレイニティス）、躁病、メランコリー、痴呆、記憶喪失、感覚鈍麻、運動麻痺などとは異なり、物質がすべて悪液質に陥ったために起るといったものではない。ここにあげたすべての病気では、危険の大きさは呼吸障害の程度によって測らなければならない。卒中の場合でも同様である。他のすべての随意運動がなく、ただ、じっと長椅子に横たわっている場合でも、呼吸だけはみられるものである。あらゆるカロス〔意識障害〕性疾病では、たとえ身体の知覚や運動が失われた場合でも、胸隔を動かす筋肉の働きだけは失われないので、呼吸が保たれているのである。このことについては、われわれは確かな証拠に基づく知識を得ているし、一方では、すべての筋肉の運動の源が、そのそれぞれの筋肉に接続する神経にあるということもわかっている。しかも、解剖学はすべての神経の最初の起始部が脳であることを明らかにしている。ここで、私が単に「起始部」とせず、「最初の」という言葉を付したのは、脊髄を考慮してのことである。つまり、脊髄からは極めて数多くの神経が枝を出しているのであるが、実際の神経活動は脳自体から脊髄に送られ、伝えられている。呼吸がかなり抑制され、苦しげであることをみた場合には、そのことが、脳内に容易ならざる疾病があることを示すものと理解すべきである。——〔そのようなことは〕すべてのカロス性疾病においていえることである。